
ハイスクールD×D平和を望む少年

雨男氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D平和を望む少年

【Nコード】

N9892W

【作者名】

雨男氏

【あらすじ】

ハイスクールD×Dに転生した少年は望んだ平和が手には入るのか？

ブローグ（前書き）

感想意見、誤字脱字ありましたらどうぞ

ブローグ

「始まりはいつも突然だった」

なーんてね！どうも、何か起きたら、知らない間に真っ白い部屋にいるんですけど何で？

確か俺はコンビニでジャン を呼んでてその後、えーーーーー
ーーーーーと何していたっけ？

「お前はコンビニで立ち読みした後、道を歩いていたらトラックに轢かれてその後、そのトラックの鉄骨の下敷きになって死んだのじや」

そうだ！！ ヤンプ読んだ後家に帰っていたらトラックに轢かれたんだ！！

それでここはどこ？天国？いや俺そんないいことしてないから地獄？

「ほほほ。心配せんでもお前さんは天国にも地獄にも逝かん」

マジ！だったら俺生き返れんの？てかさっきから聞こえてくる声は誰だよ！

「今さらかい！！まあいいワシはお前達が呼ぶ神それもこの世界の最高神、創造神じゃ

ちなみにお前さんはこの世界では生き返れん、はつきり言つと別の世界に行つてもらつ

何で？てか俺どこにでもいる普通の高校男子だぞ何で転生？

「それは、まだお前が死ぬはずではなかったじゃ。それにお前の今の人生はあまりにも不憫だったからのー」

それで俺は行かない選択肢はないのか？

「ない！！！！」

即答かよ！もういいさつさと送ってくれ

「なんじゃ？お約束の特典とかいらんのか？」

別に俺は普通に生きればそれでいいし

「それじゃワシがつまん！！特別にワシがお前の知識からいいの

起きたらそこは・・・（前書き）

原作に入るまで少しかかりますあしからず

起きたらそこは・・・

「どこだよここは？」

俺の意識が戻りあたりを見渡しとそこは、木木木木だ。

「どこかの森か？」

そんなことを思いもう一度あたりを見渡す。

やっぱり木しかないな。

「ん？」

周りを見てみると俺の体に違和感があった。普通にしゃべれてはいるが声が妙に高い、それに目線がいつもの半分ぐらいしかない。

「もしかして」

俺はある単純な結論に至ったそれは俺の体が小さくなっていることとにそしてその予想は見事的中。

今の俺は大体4〜5歳？ぐらいの子供になっている。

「確認は済みましたか？主」

不意に声がかけられた驚いて振り向くとさっきそこにいなかったはずの（ビジネススーツを着た）女性がいた。見た目は20歳位だと思っ顔は綺麗に整っているがその瞳には何も写していないただ鏡のように俺が映っている。身長は、高くモデルのようにすらっとして長い黒髪が風になびいていた。

何故に？スーツ？

「誰だ？」

俺はまず最初に一番疑問に思ったことを口にする。

「主が転生してきたときに一緒に送られた物です。私の役目は主の側に365日24時間いることです」

ヤバイ。何かヤバイ。まさか特典の一発目がこんなだとわ。ん？待てよ。

「君はさっき自分のことを者ではなく物と言ったということは、このハイスクールD×Dの世界で言う神器セイクリッド・キアなのか？」

「そうです。私は生きた神器。自分で考え自分で戦うことが出来ません」

なるほど、だから彼女は物と言ったのか。

「ありがと次の質問なんだけど君はこの世界で言う神器の強さは何くらいだ？」

「はい私の強さは、ロングス神滅具の力を持つ神器と同等かそれ以上です」

彼女は表情を変えないまま言ったそれは俺のはるか予想を超えて。

「最後に君の名前を覚えてくれ、それと、俺の特典についてもだ」

彼女は、小さく頷くと、どう見てもポケットに入らないだろうと言う袋と手紙が出てきた。最初に俺は手紙を受け取り読む。

『やーこの手紙を無事読んできると言うことは転生に成功したようじゃないな。』

それになんで体小さいかはのー、一度この世界に馴染ませないといけないかったからじゃかなみにお主の年齢は五歳程じゃ赤ちゃんだと何かと不便だと思つてのー様、体の成長は自由に変えられるようになつておる。

種族は元人間の悪魔じゃからそのほうが何かと都合がいいかと思
つての。

前置きが長くなったがお主の力についてこれから説明するぞ。

身体能力は高くしてある身体能力で上位の天使、堕天使、悪魔と
対等に戦えるほどじゃちなみにお主には武の才能と殺人技能を与え
たからの。

後、能力じゃがおぬしには直死の魔眼、蒼の魔道書、八握剣やつかのつるぎを与
えたからの力の使い方はお主の頭に直接入れたから理解できるはず
じゃ。どれも神滅具並に強力じゃから使い方には気おつけるのじゃ。
直死の魔眼は何のリスクも為しに使えるから心配せんでよいぞ。
それにお主には魔力が全くないそのための魔道書なのじゃがな、
武器はその袋に入っておる。お主、人身が武器なのじゃが役に立
つと思ひ何個か送ったからの武器の説明は一番最初に触った者のみ
自動で分かるようになっておるからの最後に彼女には名前がないか
らお主がつけてやってくれ。そしてこれを読んだら自動で前世の記
憶が消えるからの一応この世界の知識に関しては残しておくからが
んばるのジャー』

そう書いてあつた手紙を呼んだ後彼女に視線を向ける。どうやら
待っていてくれたようだじつと彼女の瞳が俺を捕らえている。

「この紙に書いているんだけど君に名前がないから今からつけよう
と思う何かいいのはない？」

「主が決めてくれるのでしたらなんでもいいです」

何でもそれが一番困るんだよねー俺ネーミングセンスないし。どうしよう。てか俺も前世の記憶消えたから名前ないじゃん。

そんなこんなで俺は名前を決めるのに30分かかった。

「君の名前が決まった君の名前は、紅彩俺くわい俺の名前は紅 零時れいじ」

「分かりました」

そういつて彼女は小さく頷いた。その顔は微かではあるが微笑んだように感じた。

名前は決まったけどこれからどうしよう。

俺はこれからの生活をどうするか全く考えていなかったのだ。

起きたらそこは・・・(後書き)

感想意見募集します

魔王と遭遇

ひとまず俺は自分の力の確認に入った。

最初に肉体変更だ流石にこのままだと動きにくい。想像する自分の成長した姿を

そうすると自分の体が薄く光はじめ全身光に包まれると俺は姿を変えていた大体今の体の年齢は18歳前後くらいだろう黒い着流しを着て長い黒髪が風で舞っている。

「何者かね君たちはここがグレモリー領だと分かった上での行動かね？」

いきなり声がし振り返るとそこには赤い髪の悪魔がいた。何故悪魔と分かるかと言うとこの世界の知識だろ大まかな世界の話や知識が分かる最もこれから先の未来は分からないが。

それにどうやら俺たちは赤い悪魔に不審者と思われたようだ。

「私達は怪しいものではないです。人間界で暮らしていたんですが悪魔だとばれてしまい退魔師達に殺されそうになったところを強制転移で逃げてきたんです。強制転移の為にどこに飛ばされるか分から

ずここの飛んだだと思えますこちらから危害を加える気はありませんので安心してください。すぐにここの領地からも出ますので」

ナイス！！彩さすが俺の従者。

「それはすまなかった。こちらも色々といざこざに巻き込まれていてねそういえばまだ名のつていなかったねサーゼクス・ルシファー魔界では『^{クリムゾン}紅髪^{サタン}の魔王と呼ばれている」

「魔王様でしたか失礼しました私は紅彩そして主の紅零時です。あつかましいのですがもしよければ泊まれる場所に案内してもらえないでしょうか？」

あれ？もしかして俺空気？

「分かった同じ紅を名に持つものだ会ったのも何かの縁だろう私の家に招待しようではないか」

ヤバ完全に空気だ。それに俺無視で話決まっているし。

「よろしいのですか？どこの馬の骨かも分からぬものを招き入れても？」

「なに、困ったときはお互い様さそれに君達は面白そうだから」

そんな理由で止めていいのか？

「ありがとうございます。少しの間だけお世話になります」

そうして俺達は魔王さんの家にとめてもらうことにした。

居候（前書き）

主人公のフラグをどんどん零時は折っていきまーす。

それと早くも主人公最強化し始めました

少しの間こんな感じの話になります原作まではまだ先

居候

どうも零時です。

あの後サーゼクスさんの好意に甘えさせてもらい今、サーゼクスさんの実家にいます。

現在サーゼクスさんの実家に居候中です、ちなみにもうかれこれ三年ほど。いやー最初は二三日だけのはずだったんだけど居心地がよくて。

まーそんな感じで今、サーゼクスの妹のリアスと遊んでいます。

しかし子供はかわいいですよー年齢的には一緒なんだけどね。

そうそう、サーゼクスの実家にいるけど、あれから色々あってー
様、蒼の魔道書と八握剣の禁手は身に着けることが出来た。
バランブイカー

ただ、力が強大すぎて禁手になれない、直死の魔眼と身体能力で
圧倒していたそれと創造神から貰った道具には二丁拳銃と日本刀が
合ったどちらも能力があり拳銃のほうは玉切れなしの氷属性が刀の
ほうが炎属性があった。

別に刀はおれ自身が刀だからいらないが一樣使っている。

「ねー」

「なんだリアス？」

「零時は、好きな人がいるの？」

ゾク！リアスがいった瞬間体に冷や汗が流れた現在俺の体には彩がいるそのためすっかりナンパなんかしようものなら軟禁がまっている、現に数回ありましたから。

「いないよ」

きつとこのとき俺の声は震えていたに違いない

「だったら将来私と結婚して」

グ！殺気が！前の日じゃないぞああ俺明日生きてかえれないは。だが俺は答えなければ子供の口約束だ

「いいよ」

そういつた瞬間俺の意識はブラックアウトした。

S i d e リアス

三年前私の前に運命の人が現れた。あの人を見た瞬間私は恋に落ちた。

今日、私は、零時に告白した、零時は苦笑いをしながらだけど受け入れてくれた。

でも零時が返事をした後零時の従者が影から出てきて零時を連れ去っていった。

私には分かるあの人も零時のことが好きなんだって。

でも絶対負けないから。

居候（後書き）

意見募集、誤字脱字も

仲間

どうも零時です。あの後、一週間ほどの軟禁と言う名の監禁にあり何とか生きてかえってこれた。

いやー外の空気がこれほどうまく感じたことはなかった。

監・軟禁にあつた後は普通に冥界でまだ暮らしている。

サーゼクス（本人にそう呼べといわれた）から家を貰い今は一人暮らしを？まー彩を数に入れたら二人なんだけど。以外にサーゼクスに息子がいたのが一番の驚きだった。

そうそう、リアスだがもう少ししたら日本の学校に通うことになった。それとサーゼクスにリアスのことを頼まれたナゼ？後、プレゼントでサーゼクスから俺も悪魔の駒を貰った、メンバーは今の所俺以外いない、え？彩？彩は神器だからノーカウントだよ。

ま、他にもリアスの眷属（イーヴィルピース悪魔の駒）が増えたりした。

メンバーとしては騎士^{ナイト}に木場祐斗、戦車^{ルイック}に搭城小猫、女王^{クイーン}に姫島朱乃。

そして三人とも心に重い問題を抱えている木場は、どこかの研究所で聖剣の実験をさせられていて命からがら逃げていたところをリアスによって悪魔に転生それで聖剣を憎んでいるし、搭城も猫の妖怪それも猫又と呼ばれる上級妖怪で昔姉と一緒にいたらしいが姉が主の悪魔を殺してしまい妹である塔城にも飛び火が来たらしいホントのことを言うところのことに關しては俺は直接、触れてないから知らないが一樣出来る限り支えるつもりだ。

姫島は半墮天使で人間と墮天使との間に生まれた子供らしいそしてこの羽がいやでリアスに会い眷属になった最も羽は悪魔と墮天使両方が生えてしまったが。

こんな感じでなぜかリアスの眷属には色々と問題を抱えているものばかりだ。

あ、忘れていたがもう一人僧侶の眷属がいたコイツのことは・・・
ま、察してくれ。

ちなみに俺はリアスの眷属ではない何でも俺も一人の悪魔としてレーティングゲームに参加させたいらしく眷族にするともったいないというサーゼクスのわがままでこうなった、最もリアスは、納得がいかない顔をしていたがな。

そして現在俺は家で人間界に行くための準備をしているその理由

は簡単だ、悪魔の駒のメンバーを集めるつもりだからそのためリアスとは一緒に入学は出来ない、そのことで一日中文句を言われた。

文句を言われているときなぜカリアス以外に塔城と姫島がいた。

一様、彼女らも眷属になったためリアスについていくしな。

そんな感じで俺の仲間探しが始まった。

メンバーを探す最初に行くところは、ザ！京都！え！何でか理由は特にない気分？

そんな感じで京都に行ってきます！！

そうだと京都へ行こう!! (前書き)

今回は話が区切っております。あしからず

そうだ京都へ行こう！！

ザ・京都。

そんなワケで京都にやってきました。

イヤーさすが古きよき時代で言つの？いいね！古い建物とか特に。

「主、はしゃいでいるところ申し訳ありませんが先に用件を済ませてください」

「へいへい」

彩に文句を言われしづぶ仕事をする。今回気分で京都に着たんだけどついと言わんばかりにサーゼクスに仕事を頼まれた、その内容が『京都に突如現れた謎の人物を捕らえろ』てことだ面倒な。

ま、サーゼクスに旅行費を出してもらっているから文句は言えないんだけどな。

「それで彩、俺はどうしたらいいんだ？」

「そうですね最初に京都にすることを挨拶しにいったほうがいいのではないのですか？」

「じゃ挨拶をしに行くか・・・・・・・・・・・・・・・・それと出てきたらどうだ」

俺は誰もいない神社の柱に声をかける、普通に見れば『なに言ってるの？』みたいな目線が来るだろうが俺は、そこに誰かいることを確信が持てた、これも殺人技能のおかげだ気配や殺気を探るのは、お手のものだ。

「ばれましたか」

俺が声をかけた柱から人影が現れる見た目は人だ、だが感じる。

コイツ妖怪か、柱から現れた人物は妖気を隠すそぶりを見せず俺に近づいてくる。

「何者ですか？主に危害を加えるなら手加減しませんよ」

「おー怖い、怖い」

柱から出てきた人物は彩の殺気に少し驚くがすぐ冗談で挑発する、だがそんなことに乗るほど彩もバカじゃない。

「お前は何者だ、俺達になんのようなのだ？」

「これは失礼した我は鵜、貴殿らが探しているものだ」

あっけからんと俺の問いに答えて鵜、まさか俺達の目的に人物が自ら来るとはそれに向こうは俺達のことを知っているみたいだし。

「お前の目的はなんだ？鵜？」

「目的？簡単だ貴殿に用があつた。あの魔王殿が認めた人物だ興味を示さんほうが可笑的だろう」

なるほど読めてきたぞサーゼクス

「そう言うことか、俺達が京都に来ることを知ってお前はサーゼクスに頼み自分を探すように言ったわけか、だがなんだ？お前の目的は？」

「全く貴殿も鈍いのさつきから言っておるではないか！貴殿に興味があるそれだけだ、それに貴殿は、今自分の眷属を探しておるのだろうちょうどよいではないか！我に力を示せ！！貴殿がわが王としてふさわしければ貴殿の物になってやろう！！」

はー何でこんな厄介ごとが多いんだただ俺は京都でゆっくり平和に観光したかったのに。

仕方ない。俺は手で彩に下がるように指示を出し鵜に向かって刃を突き出した。

「……覚悟しろよ鵜」

そう言っ て俺は戦闘を開始する。

S i d e O u t

S i d e 鵜

「……覚悟しろよ鵜」

そういった瞬間、男の雰囲気が変わった。

最初は魔王殿に頼まれ仕方なしにこの男を見ていた。だが今は違う今は純粹な興味、初めてだった自分が誰かに恐怖をするのがいつも与える側だったのに今目の前にいるものは違った。

自然に笑みがこぼれるいつ以来だろうかこんなに戦闘で興奮するのは。

S i d e O u t

S i d e 三人称

キーン・カン・キーン

互いの刃が火花を散らし交わる。

零時は刀で鵜は二対の短刀で。

「ははっはははっは」「……………」

刃が交わるたびに鵜は歓喜の声を出すだが零時は反対に何も語らない己が刃が全てを語るように。

純粋な剣技では、零時が圧倒していただろうだが鵜は己が妖怪としての力妖術を使い零時を翻弄する。

鵜、サルの顔、タヌキの胴体、トラの手足を持ち、尾はヘビで文献によっては胴体については何も書かれなかったり、胴が虎で描かれることもある、このように鵜について明確に書かれたことはないそれが鵜の能力、対象者の意識を操り自由に幻覚を見せることが出来る。

零時も幻覚には気付いているだが、対処する方法がない。

刀で攻撃をするが致命傷は全て幻覚により外され明確なダメージを与えられない。

逆に鵜は思うがままに自分の攻撃を食らわせられる。

零時は、防戦一方になりついに均衡が破られた。

「そこそこ楽しめました貴殿は強かった、ただ我のほうが強かった
それだけです」

それだけ言い残すと零時に止めを刺す。

そうだ京都へ行こう!!2（前書き）

これで京都の話はおしまいです。

次回は、魔界に戻ります、たぶん・・・

そうだ京都へ行こう!! 2

Side 三人称

「そこそこ楽しめました貴殿は強かった、ただ私のほうが強かった
それだけです」

その言葉とともに鶴は、零時にとどめを刺す。

だが結果は無残にも零時の胸に刀が届くことはなかった。

「鶴、あんたはよくがんばったなかなか強かったぜ。だが
」

零時の言葉とともに零時は己が神器を発動させる。

「これで終わりだ」

Side Out

Side 鵜

「これで終わりだ」

その言葉と同時に奴は我に斬りかかった、だがさっきと刀が違う。さっきまで使用していた炎の刀は、虚空に消え奴は、さっきと異なる刀を握っている。

一言で言えば無骨。

すぐに折れそうな程の細い刀。刀には、つばはなく、もつ所も白い布で巻かれているだけだ。

それだけの刀、それだけなのに我は押し負けている。

奴の力が上がったわけではない、自分が手加減しているわけではない、なのに奴の刀が我に届く。

倒れるそうになる鶴を支える。さっきまで幻術でばやけて見えていたが今は、はっきり見える、綺麗な白い髪にそれに負けず劣らずの美貌そんなことを思っていると後ろから声が掛かる。

「お疲れ様です、主。ですがなぜ最初から神器をお使いになられなかったのですか？」

「今回自分の身体能力を把握したかったんだ」

ま、ここまで追い込まれるとは思ってもいなかったけどな。それよりも・・・

「コイツどうしようか？」

そんなことを思いながら、俺達は今日泊まる旅館を探しに行った。

S i d e O u t

S i d e
襦

「ここは？」

「ここは京都のとある旅館だ。お偉いさんに挨拶に行ったらここを教えてくださいただだ」

答えが返ってくることを期待していなかった、だが驚きはそこではない。今しがた命を懸けて戦った者が目の前にいる。だが奴はなんでもないかのように我から視線を外した。それが酷く寂しく感じた。

「お前これからどうする？俺を知っていたってことは、俺の眷属になる気があるんだろ？ま決めるのはおまえ自身だ好きにしろ」

そう奴は言い放つももちろん私の選択肢は決まっている。

「我は汝の矛となり楯となろう」

S i d e O u t

S i d e 零時

「我は汝の矛となり楯となろう」

よし！これでひとまず眷属が一人増える実力も申し分ないしな。

「これからよろしくだ主様」

そう言っ て 鵠が抱きついてきた。

そして抱きついた瞬間から彩が膨大な殺気を放って『殺す殺す殺す
す』てずっと言っているよ。

ま、家族が増えてよしとするか。

そう思い俺は彩をなだめることにした。

そうだ京都へ行こう!! 2 (後書き)

新しく零時の家族が増えました、何の駒にするかは今度のお楽しみです。

それでは次の話で会いましょう~~~~~

プロフィール（前書き）

どうも。

そういえばキャラの紹介していなかったので紹介します。

鶴についてももう少ししたら更新します。

それと聴きたいのですがやっぱりリアスはイッセーとくつつけた
ほうがいいですか？

それについて何か意見どうぞ！！期間は一週間ぐらい？

その間も主人公の仲間探しの話は進めていきます。

プロフィール

名前 紅 零時 くない れいじ

顔 ブリーチの斬月と一護が融合したときの顔

髪の毛を腰まで伸ばしていて後ろでくくっている。

身長 175（通常時）

体重 平均よりやや痩せている

神器 蒼の魔道書

直死の魔眼

八握剣

能力解説

蒼の魔道書、体外にある生命力や魔力を吸収し自らの魔力に変える変換率は無限で機能を止めるまで発動され続ける、発動中は体の回りに黒いオーラが放出され腕に黒い紋様が現れ、髪も白くなる。某対人ゲームと違い腕は義手でなく右腕に直接宿っており手の甲に小さく紋様がある。

普段は皮手袋で片手だけ隠している。

直視の魔眼、人や物の死の線が見える点は見えない。

八握剣、全てを斬るをコンセプトにしており通常時は体の中にある、使うときになると体から出てくる本数に制限はなく魔力がなくなるまで出せる。剣の形としては細い日本刀で柄の部分が包帯で巻

かれている

性格 めんどくさがりや、朴念仁、気配り上手、主夫

名前 紅彩 くない さや

身長 180

体重 秘密（本人曰く）

神器 ??????

性格 主命、主一筋、主の為ならなんでもする――――

――――

鶴、妖怪としての苦悩前編（前書き）

少し長くなったので二つに区切りました多分おかしい話になって
ますが気にしないでください

後、アンケート募集してます、リアスはイッセー、オリ主どっち
もやってます意見どうぞ

現在イッセー3 オリ主1

鵠、妖怪としての苦悩前編

Side 零時

『テウルウリン!!』

零時の眷属が新たに増えた』

「何してるんですか主？」

え？何って某ゲームのスカウト音？多分？

「知らないのか鵠？」

「いえ」

マジ！ここでジェネレーションギャップがー

「主、ふざけるのもいい加減にして魔界に戻りましょう。あの腐れ魔王を滅せねばなりませんから」

うわー！。いつの間に彩こんなに物騒になったんだ？

「最初からです、私の行動原理は主、主、主、の三つで来ていますから」

すごいねー。臆面もなくそんなことを言えるなんて後、心を平然と読むのはやめよう。

「そんなことより彩、鵠に駒としての役割をあげないとな」

「そうですね。彼女ならやっぱり騎士^{ナイト}ですか？」

「確かに、彼女の剣技を考えればそうかもなでも、俺的には、戦車^{ルーク}になって欲しいんだ」

「どうしてですか？」

「鵠と戦ったときに感じたんだが剣技はすごいが、力がなかったの

か剣に威力がなかった」

それに、無理やり幻術を戦闘にいれている気がしたしな。

「そうですか」

それだけ言って短く頷いてくれる。こういつとき物分りがいいとたすかるよ。

「そういうわけだから鵠君には戦車になってもらうよ」

「我が主が申されるのであれば我はそれに従うのみですから」

「ありがとう鵠」

そう言って優しく笑う、そうするとなぜか顔を赤らめる鵠。

「鵠、さっきから気になっていたんだが君の名前はなんなんだ？俺と戦ったときも名を名乗らなかったし？それにあったときからそうだったけど、どうして君の姿がぶれて見えるんだ？」

そう、これが一番不思議に思ったことだ。

最初は戦う為、隠しているのだと思ったが、気絶しているときも、姿がぶれて見えていた。

そのことを聞くと鵜が口を閉ざし空気が重くなった、俺はただ鵜が口を開くのを待った。

「主は、妖怪がどうやって生まれたかご存知ですか？」

沈黙から出たのはそんな短い言葉だった。

鵠、妖怪としての苦悩後編（前書き）

どうもこんにちはこれでひとまず鵠のお話は終わりです。

シリアスにしようと思いましたが、主人公に合わないと思います。こし軽めにしました。

そして恒例？のオリ主とイッサー、リアスをどっちに入れるかです。

現在

イッサー3 オリ主5となっています今週の木曜日を最後にしますのよろしくお願いします。

鵒、妖怪としての苦悩後編

S i d e 鵒

「主は、妖怪がどうやって生まれたかご存知ですか？」

沈黙から出たのはそんな短い言葉だった。

「知らん!!!!!!!!!!」

「え？」

我の答えにばつさりと主は斬る。

「お前がどんな存在でもお前はお前だ！それ以上でもそれ以下でもない！」

そんな風に主はこともなげに言って見せた。

我、鵠と呼ばれる妖怪に親はいないどこで生まれたのか、どうやって存在しているのか分からない。

それが我の鵠としての存在理由。

だが主はあっさりとそれを斬った。

「自分の存在理由が欲しいのなら俺がやろう。鵠！主が命じる、未来永劫我の楯となり剣となり我の側にいよ」

わがままな命令だずっと側にいろと。

「全く、主はわがままだな。こんな姿の我が良いのか？」

「姿なんか関係ない。俺がお前を欲しているだけだ！」

「分かった今ここにもう一度誓う我、鵒は未来永劫、紅零時くれないじを主と認めともに未来を進むことを誓う」

誓い頭を下げる。

「よろしく夜」

「夜？それはなんですか？」

頭を上げ問う。

「お前が名がないといったからだ鵒は夜の鳥と書くだから夜それだけだ」

その後『単純な名だけどな』とつけたした。

初めてだった名を付けられたのはそして名で呼んでもらうのわ。

「私もよろしくね夜」

「ああ。よろしく頼む主、紅」

S i d e O u t

S i d e 零時

「ああ。よろしく頼む主、紅。」

そういつて鵜改め夜は微笑んだ。

「最後だ夜お前を俺の従者として悪魔に転生させる」

そついつと夜は黙って俺を見る。

「そこでだ！お前の姿を定着させる」

「え？」

「なに、簡単なことだ妖怪としての性^{さが}なら、悪魔になれば多少は変えられはずだ」

「そんなこと出来るんですか？」

そつ、普通は出来ない、だが神のいない今の世界なら出来る。

「問題ない少しズルをするが」

そついつと不思議そつに首をかしげる。

「俺の従者、紅。アイツの能力を使う。紅の能力（神器）は『ただ一つの記録』^{オンライン・メモリー}を使うこれは、存在している概念を変える、これを使

い夜を転生させるときにもう一つ戦車の駒を使い元妖怪の鵂でなく悪魔の鵂として存在を定着させる。

鵂自体に使わないのは体が拒絶反応を起こす可能性があるからだ。
わかったか」

「????????????」

人と通り説明するが理解できないのか頭から煙を出しショート寸前の夜。

ま、試したほうが早いだろう。

俺は鵂の側にまで行き駒を二個取り出し、準備をする。

紅の力を借り一つの戦車の駒の概念を変える、そしてもう一つの駒を夜の前まで持つてくる。

「いくぞ」

俺の問いに小さく頷く夜。

「お前女か――――」

そんな叫びとともに夜の悪魔としての転生が終わった。

だが知らなかったこの光景を見ていた奴がいたことに。

鶴、妖怪としての苦悩後編（後書き）

夜のプロフィールも後日出します。

補足

紅の能力は概念を変える能力ですが概念一つにつき一つ変えることが出来ます。

ちなみに概念であればなんでも変えることが出来ます。

あとオリジナルの神器も募集します、作者の貧困な頭をお救いください。

それではさようなら。

主はいつも死の危機？（前書き）

こんにちは、今回は、スピンオフです。

零時が彩に監禁、もとい軟禁されかけのお話です。

そして明日までになりましたリアスはオリ主、イツセイーどっち？
投票お待ちしています。

現在

オリ主 8 イツセイー 5

投票してくれたかたは、ありがとうございます。

では次のお話で。

主はいつも死の危機？

「あのー彩俺は何でベットに括り付けられているんでしょうか？」

しかも鎖。

「主、私も本当はこんなことはしたくないんです」

ならするなよ。

「ですが、主があまりにも見境なく女の人を誘惑するので少し
h a n a s i をしようと思ひまして」

「待て！これのどこがお話だ！どう見ても何かする気満々だろうが
！」

「いえ。男で言う拳で語り合うということですよ！テへ」

は？何言ってるの？どう見てもワンサイドゲームじゃないか！し
かもテへ じゃねーーーーー

「まで。彩何があつたんだ？話し合おう、本当に話し合おうじゃないと零時さん死んじやうから！」

「ダメです」

ヘルプ！ヘルプ！彩さん目に光が灯ってないから――――

ちよっこつちに來ないで死ぬ死ぬ――――

ガチャ

ん？

「零時――遊びに來たよ！」

おお――我がメシアよ良くぞ來た。

俺を頼むどうか助けてくれ。

「何しているの？零時？」

「これはこれは、主に迷惑を掛けてばかりの小娘、リアス様ではないですか」

ちよい待って！何、喧嘩売るようなことやってんの。

「どうも愚図従者」

そしてリアス、君も買うな！！

私の命が――――

「なんですか？小娘様？これから私は主と楽しい会話をしないといけないんですけど？」

「会話？笑わせないで零時が嫌がっているじゃないそんなことも分からないの？」

にらみ合う二人そして・・・

ボソ

「貧乳小娘」 「逝かれ従者」

ブチ

あ。なにかすごい危険な音がしたよ。

そしてリアス、君は僕を救ってくれるんじゃないのか。

そんな俺の考えをよそに二人は喧嘩を始めた。

え！

俺、オンザベット。

現状縛りつけ（鎖）

あ。死んだ。

そんな俺のむなしい考えは、二人の喧嘩とともに綺麗に消えた。

文字どおり綺麗に。

喧嘩終了後

「主、では約束の o h a n a s i をしましょう」

「ヘルプ、ヘルプ――――」

「大丈夫ですいたいのは一瞬ですから」

「ヘルプ、へ『ガッ』バタ

「さてゆっくりと体に o h a n a s i をしましょうか」

俺はこの後どうなったか知らない、聞きたくもないただ俺は自分の無事を感謝した。

主はいつも死の危機？（後書き）

無事帰宅？（前書き）

投票結果発表

オリ主9 イッセー5 よってリアスはオリ主のハーレムに行きます。

パチパチ！！

そして今回は、やっと零時は自分の家に戻ろうとします。

そして新たな敵しゅっげん？

無事帰宅？

S i d e 零時

「じじは？」

俺達は本来ならば転移魔方陣で自宅の前にいるはずだ。

だが現状は著しく異なっている。

自分の視界の中に家はなく、謎の不気味な城がある。

「夜、彩、いつでも動けるようにしておけ」

二人にいつでも動けるように声をかけ再度、あたりを観察する。

枯れ果てた大地、不気味な城、赤い空、全てが異形と呼べる場所に俺達はある。

「ん？」

あたりを見ていると城の前に誰かが現れた。

夜と彩は警戒を強め城の前に現れた者を見据える。

「お待ちしておりました。私は、わたくしこの城で従者をしている者です」

そう言っ
て彼女は礼儀正しく頭を下げた。

「貴様の主とやらが我が主を呼び寄せたのか？」

夜は殺気を放ちながら城の従者に問う。

いやいやいや。確かにそれも気になりますよ夜。ただどさーもつと気になるところがあるでしょう。

「はいそうです」

「そうか」

え！それだけなんで彼女の格好を聞かないの？

まだ。百歩譲ってメイド服なら納得しよう。

だが！何で彼女はナース服なんだ！！しかもかなりにあっているし。

「主、気にすることはありません、よろしければ私、彩が着てあげますので（ニコ）」

何言ってくれてんの？誰もナース服が良いなんて言っていないしそもそも何でナース服を着ているか知りたいだけだし。

「はーもう良いよさつさといこうか」

「ではご案内します。ついてきてください」

そう言って歩くナース服の従者の後を俺達はついていく。

しかし、違和感がある。

俺は彼女を観察したが可笑しい彼女からは、生命の流れを感じない。

人も悪魔も天使も生きているそしてたとえ神器だろうと微量ながら生命の流がある、だが彼女にはそれがない。

それどころか魔力、気すらも無い、感じ無い、まるで最初から存在していないかのように。

また彼女の見た目にも気になる点が多い、死人のように白い肌、浮き出していない血管、白髪がほとんどのくすんだ金髪。

そんな見た目に俺は一つの答えを自分で導き出した。

彼女は生きていない、そして死んでいない

生きる死体『人造人間』

そう俺は答えを出した、そしてこの考えが俺の未来を左右することになるかも知れないことにまだ俺は気付くことはなかった。

館の主と従者（前書き）

今回ナースの存在が明らかか、そして主、登場！！彼女の目的は？

館の主と従者

Side 零時

ナース服を着た奇妙なメイド？従者？に城の中を案内された俺達は、大広間のような所で城の主と対面している。

しかし面倒だ、なぜ椅子がない？このまま立ちばかよ！

「よく来た、歓迎する。私はこの城の主、ブラン・W・ノワール。道案内をしたのが私の従者だ」

そう言ってこの城の主ブランは自己紹介をしてきた。

ブランド名乗った奴の見た目は、まー普通に美人かな？美人と言うよりは美男子よりの顔に透き通った肌、銀色の短髪、青色の瞳そして俺が女だと分かった最大の理由それは！

服装だ、明らかに男を挑発するような格好をしている、白を主体とした服は、胸元は大きく開き頭を下げると胸が大きく揺れる。下に視線を移すと体のラインがはつきりと見えるぴちぴちのズボン。

男だったら泣いて喜ぶだろう、だが俺の両サイドには修羅と般若がいる。胸元を見た瞬間二人からほぼ同時に目潰しを喰らいかけたしな。

「知ってるようだが一様名乗っておこう。紅零時だ。くれないじ 両サイドにい

るのが俺の従者、俺から向かって右が紅彩^{くれさい}

礼儀にのっとり俺も返す。だが視線は逸らす、隣にいる修羅と般若に何をされるか分からないからな。

「まずは無理やりこの城に呼んだことを謝ろう」

そう言っ
てブランは頭を下げた。

「ああ、別にいいよ、で用件は？わざわざ俺達の転移用魔方陣に干渉までしてきたんだ、俺達を呼んだ理由を教えろ」

「そうだな、零時お前を呼んだのは他にもない私と私の従者を殺してくれるよう君に頼みたいんだ」

「は？」

まで、これは俺の聞き間違いか？

「突然のことで悪いと思うだがこれ以外私達が運命から逃れるすべはないんだ！頼む私達を殺してくれ！」

懇願、涙を流しながら目の前のブランは頭を下げる従者はそれに寄り添うように主の側による。

「悪いが理由を話してくれ突然そんなことを言われてもどうしようもないからな」

俺がそう言っているとブランは小さく頷き自分のこと、自分の従者のことを話し始めた。

「私は、魔女だ。人の身でありながら強大な力を見に宿してしまった。そして滅びた魔女唯一の生き残りだ。

私はこれでも何世紀も生きている。その理由がこれだ」

そう言っているとブランは自分の胸に手をやり何か呪文を唱えるそうするとブランの胸の周りが光ると同様に時計が出てきた。

時計は、ブランの胸より少し上に現れ今はブランの体と一つになって胸元の所にくっ付いている。時計はローマ数字で刻まれ小さいながらも神々しさを放っている。

「これは？」

俺は思わずブランに聞いてしまった、隣にいる俺の従者達も不思議そうにしている。

「これは私に宿っている神器、灰かぶり（シンデレラ）能力は時間を24時間前に戻すこと。

そしてこの力は一日一回強制的に自分に効果が発動させられる、その所為で私はこの若若し姿を保ったまま。

もう嫌なの大切な人が死ぬのも、誰かに忘れられるのも、だから私を殺してくれ零時」

なるほどな。

「あんたの理由はわかった、だがブランあんたの従者はなぜ殺さなければいけない？」

「彼女も私と同じような理由だ。

はるか昔、まだここに城を構える前の頃だ、たまたま寄った国そこでは、酷い疫病がはやっていてな、私は問題なかったがそこに住んでいる人々をどんどん死んでいった、それを食い止める為私の従者の父があることを思いついた、それは元気な人間に病原菌を射ちそこからワクチンを作ろうとした、そこで実験台になったのが実の娘だったわけだ」

ギョ

その言葉を聞いた瞬間怒りが湧き上がる。

「いいのです、零時さん、村で唯一元気だったのが私だけでしたか

ら」

俺の表情を見て思ったのか彼女は苦々しく笑う。

「それでも結局ワクチンは作れませんでしたし」

え？

「じゃなんで君は今ここにいるんだ死んでいるだろう普通」

「そうですね結局ワクチンは作れませんでした」

『その段階では』と彼女はつけたして。

「その後、私にあることが施されましたそれがいま私が存在している理由です。」

ワクチンが出来ず、自分の所為で娘の命を奪いかけている、そう思った父は私を

生きる死体『人造人間』になるよう施しました。

人造人間になった私は死なくなり不老不死になりました、そして不老不死になった私を使い父は、ワクチンを作り村人を救いました。

その後は、不老不死になった私を気味悪がり恐怖した村人に追い出された時主が拾ってくださいましたそして長い年月をえて今に至ります」

そして、最後に二人そろって俺に殺してくださいと言った。

館の主と従者（後書き）

どうも今回の話は自分の好きなマンガを参考にしました、まかぶ
ったが気にしないそれでは火曜日に――――

――――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9892w/>

ハイスクールD×D平和を望む少年

2011年10月9日21時14分発行